

AMAUTA夏休み宿題支援に参加して



国際学部 3年

安藤 美海

今回、初めて AMAUTA の活動に参加することになりました。AMAUTA とは、真岡市で開催されているスペイン語教室です。普段はスペイン語を母語とする子どもたちが日本において母語を維持するために利用されているようですが、夏休みになると児童生徒の夏休みの宿題支援を行う場として開かれます。

この夏、AMAUTA に学習者として参加したのは、小学校1年生から中学2年生までの合計20人ほどでした。一方で学習支援にあたるボランティアは毎回7~8人が参加しており、学年ごとに数名のボランティアが隣について宿題を見るような形になっています。私が担当したのは小学6年生の女の子3人と中学1年生の男女4人でした。参加する前、私は今まで誰かに教える経験をしたことがほとんどなかったため、とても緊張していました。しかし、実際に話してみると生徒たちはとても活発で素直な子が多く、すぐに打ち解けることができましたように思います。また、私はスペイン語やポルトガル語を話すことができないので、コミュニケーションの面で不安がありました。しかし、ほとんどの生徒は日本語を使ってコミュニケーションを取っていて、その部分で困ることはありませんでした。

その一方で、子どもたちの宿題を見ていると気づいたことがいくつかあります。一つ目が、AMAUTA に通う多くの子どもたちが共通して国語に苦手意識を持っているということです。「国語が一番苦手?」と聞くと、「だって日本人じゃないもん、出来ない」という子がいました。特に文章を読んで答える問題や、慣用句を答える

ような問題に対して苦手意識があると教えてくれた子もいました。二つ目が国語のつまずきに比例して、他の教科の文章題に苦手意識を持つ子が多いということです。私が担当したAさんは、算数の問題文の意味を私と一緒に参加していた友達に何度か聞いてきました。

しかし、苦手があっても生徒たちにはそれぞれ好きなこと、得意なことがあります。「学習支援」と聞くと生徒の出来ないことに焦点を当ててしまいがちですが、生徒たちとの対話を通して、好きなことの話、学校の話、友達の話をとくさん聞くことが出来ました。また、会話の中から、私が教えるだけでなく、生徒たちから教わることもとても多かったです。AMAUTA の活動に参加させていただき、普段の大学生活では出会えなかった人たちと様々な話をすることができました。微力ではありますが、日本語を母語としない子どもたちが、自分の好きなこと、得意なことを伸ばし、充実した学校生活を送れるようにサポートし続けていきたいと思っています。

